

「コーポレートガバナンス」という 授業の難しさ

北川 哲雄

(証券アナリストジャーナル編集委員会委員)

1. はじめに

私は、2005年から15年以上にわたり大学院のMBAコースにて「コーポレートガバナンス」という授業を担当してきた。前任者の科目を引き継ぐという形で多くの科目を担当することになった。他の科目についてはある程度、実務家の時代にも関わってきたものであり何とかこなせたが、当科目には馴染みがなく、悪戦苦闘したことを思い出す。

そして、このころの授業の内容と最近の内容とでは大きく異なる。厳密に言えば、毎年異なる。この10年は特にそうである。その理由は本誌の読者にはいうまでもないであろう。

授業内容はすべてUSBメモリーで毎年残している。また参照した資料（企業のアニュアルレポート、株主総会招集通知、コーポレートガバナンス報告書、サステナビリティ報告書）についても膨大なものになった。その多くもできる限りUSBメモリーに保存してある。

ちょうどそのうちのかなりの部分を再読する機会があり良い復習になった。これを機にコーポレートガバナンスに関して自分自身が何を悩んできたか、その変遷を記したいと思う。確かにわが国におけるコーポレートガバナンス・システムは大きく変わった。しかし、一律に素晴らしい進歩で

あったと断言できない部分が私の心の奥底にはある。このあたりを率直に披瀝したいと思う。

2. 二つの基本テキスト

苦闘の歴史と述べたが、担当し始めた頃はまずテキストに何をを用いるかに苦慮した。

様々な和文の関係本を眺めて困ったのは（私が思う）良書がなかったということであった。私自身は資本市場との関係を中心にコーポレートガバナンスの様々な問題を論じている本があれば、特に欧米の事情について豊富なケースを交えている書があればと思い随分探したことを思い出す。

(1) 米国の著者によるテキスト

だいぶ格闘する中、見つけたのがKenneth A. Kim and John R. Nofsinger教授による著書 *Corporate Governance, 2nd Edition* (2005: PEARSON Prentice Hall) であった。お二人は米国のビジネススクールの教授であり、当然のことながら米国における事例が中心である（注1）。

2005年といえば、いまだ米国では2001～2002年にかけて起きたエンロン・ワールドコム事件の余韻冷めやらぬ時である。両社のみならず会計不正を行った企業が多くあり、それを見抜けなかったことに絡めて取締役会の形骸化や経営者